

神奈川支部情報

第7号 発行日 2008年5月30日

<発行者>撫順の奇蹟を受け継ぐ会神奈川支部

<連絡先> 松山英司 TEL/FAX 046(871)4263

e-mail kan.mat.hid@tbc.t-com.ne.jp

郵便振込口座 00190-2-114578

神奈川県民センター「市民活動フェア」で証言

横浜駅前の神奈川県民センターでは、毎年3月に全館を利用してあらゆるジャンルの市民団体が参加する「市民活動フェア」を2日間にわたって開催しています。私たち神奈川支部も初めてでしたが参加することができ、2日間とも証言集会を開催しました。

フェアは屋外、一階ロビー、二階ホールから6階から11階までのすべての各部屋、各スペースでそれぞれ工夫を凝らしたイベントが開催されていました。「中帰連」や「受継ぐ会」のことはまったく知らない人ばかりの中で、誰でも入れるように後ろのドアを開けたまま開催しました。「ちょっと覗いてみようか」と立ち寄った人が話に引き込まれて最後まで参加していった人もいました。

二日目の「坂倉証言」は、高柳さんが坂倉さんの話しやすいように証言を引き出してくださって、今まで十分にお話しができなかった部分も今回新たに証言していただきました。下記のとおり報告します。二日間でのべ75人の参加があり、一日目の絵鳩さんの証言は別の機会にあらためて報告します。

坂倉：高柳対談<2008年3月16日 神奈川県民センター>

<あの戦争が>何も無かったの？

高柳：私の小学生の時です。学校へ入るとすぐに124代の歴代天皇の暗唱させられるのです。私の特技のように「ジンム、スイゼイ、アンネイ・・・と、今でも言えるのです。まるで呪文ですね。「神武天皇から・・・明治、大正、昭和」までお経のように唱えるのです。これができない子は日本人の子供ではない、とされてしまうのです。

教科書も歴史も、全部そのように染め

あげられていくのです。否応なく軍国少年、軍国少女になりますよね。そしてある日突然に、敗戦となるのです。私は東京で暮らしていましたから、空襲の恐さを知っています。原爆を落とされたことも知っていましたよ。でも神風が吹く、ということを感じていたのです。教科書にも書かれているし、校長先生もそう教えてくれているのです。信じますよ。中学2年にもなってよく（そんなことを）信じたと思いますが・・・。教育って怖いですねえ。

どうも戦局がうまくいっていないことは、薄々は感じていますよ。でも神風が吹く、と思っているのです。そして昭和20年8月15日昼、今日は現人神、「生き神様」と言っていました、「天皇の玉音放送がある」と聞かされていました。天皇は生き神様だと信じていましたから、おしっこは銀粉が飛びだすのかなあ、とか大きい方は金のかたまりかなあ、とか大まじめにそう思っていたのです。そうでなかったら生き神様だとは信じられないですよ。

その生き神様が今日ラジオで直接私たちに話しをするというのです。これはいいいよ大号令だろう。「玉砕」ということが言われていたので、さあいよいよ玉砕だ、それを機に神風が吹くのだ、と思いながらじっと聞いていたのです。なんと言ったらわからない声がラジオから流れてきました。電波も悪く「ガーガー、ピーピー」の合間合間に、じつに珍なる声が交ざるのです。何をいつているのかはわからない。でも一瞬にして私の夢は覚めました。神様だったらこんな声を出すはずはないと思いました。一瞬にして15年間の皇国史観の教育が崩れ落ちたのです。すごいですね、直観とはね。

そして学校が始まりました。いままであれほど教えていたものがまるで無かったように、教師のいうままに教科書に墨を塗ったのです。変だなあ、思いますよね。丁度思春期で、もの思うころです。

昨日まで正しいことだったのになぜ駄目になったか、の説明は一切無いのです。皆さんにお見せします。このように墨を塗った教科書をみたことはありますか。この様にして先生の言うままに（いまま

でのことは）無かったことにしてしまうのです。

おかしいですよ。日本国のスタートはこうしていままでのことは無かったことにして、墨をぬって「今日からは民主主義です」とはじまったのです。それについての反論はできなかった。でも、おかしいなあという思いは子供心に私の中に染みこんでいたのです。

その後、私は教師になりました。私の教えている子供たちには二度とこのように教科書に墨を塗らせない、と決心しました。しかし、教師を続けているうちに日本の平和教育、平和学習に疑問を持つようになりました。日本の平和学習、教育の多くは、「被害者として」戦争はこりごりですね、ということです。たしかに原爆も東京大空襲もたいへんなことにはちがいありません。だから戦争は怖い、という言い方でいいのだろうか。私も墨を塗っちゃったけれど、正しいことは何だったのか、加害のことを学習し、お互いに認識し合わないで、平和学習とか平和運動と言ってもおかしいのではないかと思うようになっていったのです。そんなことから私は中帰連の方たちに関心を持って、つながっていきました。

これが片方の面なのですが、私がなぜこの本（あなたは三光作戦を知っていますか）を出すことにしたかということです。私は薬害エイズ裁判を支援していました。血友病の人たちが、731部隊で生体解剖をした医者の一人、内藤某が日本へ戻ってきてから「ミドリ十字」という製薬会社を創りました。血友病の人たちは、その会社で造った血液製剤を体内に入れたために、HIVに感染したとい

うことを、裁判を支援する中で知ったのです。

いまは参議院議員になっている川田龍平君が高校生のころ、もう一人の原告の少年と二人の少年と親しくなりました。この裁判は和解となりましたが、私は関いたのです。そうだ、この川田龍平君と中帰連の篠塚さんと一緒に中国へ行って、加害の事実を直接に肌で感じるという、そのような旅を企画しようと思いました。龍平君を団長にして、篠塚さんと一緒に30人近い人たちと一緒に行ってきました。もちろんそれは感慨深い旅でした。

そしてまた思ったのです。こんないい旅を参加者だけが聞いて終わりにするだけではもったいない、と。何とか本にしよう、ということで書いたのが「日本にも戦争があった」シリーズNo.1の「731部隊少年隊員の告白」だったのです。

この本が完成したら、篠塚さんから、坂倉君の体験も中学生、高校生向けに書いてくれないか、と提案されました。なぜ中学生、高校生にこだわったかということです。元々は篠塚さんは15才で少年隊に志願したということ、自ら進んで少年隊に入ったのです。そのことを「なんで！」という？が私の中にありました。実際はえさで釣ったのです。篠塚さんはえさで釣られたのです。地方の真面目で、しかし上級学校へ行く境遇にはなかったという頭の良い少年を大学まで行けるぞ、と釣り上げたのです。満州医大へも行かれるぞ、と。そんなことから中学生、高校生に読んでもらいたい、ということです。そして坂倉さんの話に続くのです。

よくもまああれほどまで

坂倉さんが、自分が書いた証言原稿を送って下さいました。厚さが5センチはあったですね。四〇〇字詰め原稿用紙にビッシリと書いてあるのです。私は国語の教師をしていましたので、原稿用紙への書き方は子供たちにも教えました。ですが、坂倉さんの原稿は最初の一字から四〇〇番目の文字までビッシリ書いてあって、余白もなかったですね。しかもこんなに厚いのです。

キチッと綴じてある原稿用紙を見ながら、私はいろんな思いをこの中にこめたのだと思いました。でも、書かれてあることを全部活字にすることは別の機会にお願いすることとして、ここにあるように中・高生向けに書きなおそうと思いました。そこで坂倉さんから直接聞いたり、原稿を読み返したりすると本当にむごい話がイッパイあるのです。篠塚さんのときもすごい話でしたよ。ですが、どちらがきつかったかというと坂倉さんの話をまとめる方がきつかったですね。なぜなら、七三一部隊の話は本当に非道いなあ、という自分の五感に回ってくるような話ですね。でも、生体解剖の時の、その話だけです。その前後はそうでもなかったのです。

ですが、(坂倉さんの) 三光作戦の証言はよくもまああれほどまでも、とご本人が一番思っているのでしょうか、「これでもか」「これでもか」と、非道い話が出てくるのです。あまりにも数の多い残虐行為が……。三光作戦とはご存知のように「焼き尽くし、奪い尽くし、殺し尽くす」と言われていますね。私はもう一つ

「犯し尽くす」と言うことを付け加えるのですが、これでもかこれでもかと、事例が出てくる坂倉さんの話を読みとるのはきつかったですね。そして、たくさん書いてある中でどの部分を抜き出して書くか、ということで苦心しました。

この本に書かれているのは、坂倉さんが事例をあげてくださったことの一端です。ここに書かれていることだけではないのだ、ということを申し添えておきます。ここで坂倉さんのお話を聞きます。他の体験者の方もそうなのですが、一番最初に犯した罪行が、自分の中に一番刻みつけられているのです。坂倉さんの書かれた文書から見ても、最初の体験が刻まれています。そこで、坂倉さんが最初に犯した三光作戦の事実を話していただきますでしょうか。

戦争とは素晴らしいものだ?!

坂倉：最初の体験を話す前に私自身の戦争観について、「子供のときからもっていた戦争観」、「軍隊に入る直前の戦争観」、について皆さんにお話してから本題に入りたいと思います。

子供のときから私は戦争ということについて素晴らしいものだ、と思っていました。私が戦争のことを初めて聞いたのはあの満州事変、9・18事変ですね。あのときから戦争ということは素晴らしいなあ、と思ったのです。日本の軍隊も素晴らしいと思いました。

日本の〇〇師団という騎兵師団と中国の軍閥の馬占山軍と戦って、日本軍が窮地に陥ったということでした。地の利を得た馬占山軍に沼地のようなところに追

い詰められて、敗戦となったということでした。そのことを知って、戦争ということはこういうことかと思いました。

もうひとつのことは、ノモンハン事件の話聞いたことです。ノモンハンから帰ってきた人とは口を訊いてはいけない、ということが言われていました。だが、極秘だよということでした。どれほどひどい負け方をしたかというハイラルの草原で、飛行機や戦車を相手に戦争をしたらしい。日本軍側の装備はたいしたものが無くてめちゃくちゃにやられてしまった、ということでした。話してはいけないということだったが、私にもわずかに漏れ伝わってきました。ソ連はすごいなあ、と思ったのです。このように戦争というものは、お互いに銃火器を構えて大砲を打ち合ったり、飛行機を駆使したりして戦うこと、これが戦争だと思っていたのです。

私は昭和15年12月4日に徴兵検査に合格して軍隊に入りました。すぐに中国へ連れて行かれて、山東省の泰安というところで初年兵の教育を受けました。5ヶ月の教育のあと、昭和16年6月に初年兵の「教育討伐」に参加させられました。その教育が終了して、山東省の蒙陰県というところのある村落に八路軍の兵器廠か、食料廠があるという情報に基づいて「匪賊(ヒョク)討伐」に出動しました。前の夜から行軍をはじめて、静かに静かにその部落へ近づいて行きました。小雨が降って、前がまったく見えない状態の中、ある同年兵がぼったりと倒れて死んだのです。朝になってその村落を包囲しました。同年兵がやられたことから計画が2時間くらい遅れたようです。「払暁(フ

「攻撃」の予定だったのがすでに明るくなっていて払暁ではなくなっていました。

部落の城壁に日本軍がよじ登って部落の中を監視して、一部の兵隊は部落に突入したのです。突入部隊が家から家へと家捜しをしている様子が見えました。鶏が飛んだり、騒ぎが聞こえました。私はまだ慣れないせいか、「下に降りないで、中の様子をよく見ておけ」といわれて、城壁からの監視を命ぜられました。

そのうちに、15、6人の黒い集団が村落から逃げていくところを発見したのです。「小隊長どの、あそこに敵兵が逃げていきます！」と報告としたところ、「ばか者！すぐ追え！」「撃て！」と怒鳴られてはじめて発砲しました。約300メートルの距離の集団にむけて撃ったところ、そのうちの一人がバタッと倒れたのがわかりました。

「一人倒れました！」と報告したら、「すぐに行って敵の武器を取り上げて来い！」と命令されて、高粱畑と粟畑の間を駆けて行きました。高粱畑の隅で黒い影を見つけました。「敵兵」を発見して、「自分の撃った弾があたったのだな」と内心喜びながら近づいたところ、それは女性でした。見るからに農民で、八露軍でもなんでもなかったのです。

女じゃ武器を持っているはずが無いだろうと立ち去ろうとしたら、倒れている女の脇から小さい子供が、1歳くらいだろう。その子供が顔を出してきたのです。母の乳房をさぐった手は血で真っ赤でした。私の顔を見てニヤッと笑ったように見えました。私は足がすくんでしまいました。私は最初にこのようになんとも言

えない罪行を犯してしまいました。

高柳：これが坂倉一等兵のはじめての「殺し」体験です。私はそのあと次のように書きました。「あの笑った赤ん坊は、冷たい、真っ赤な乳房をなで回しながら死んでしまったのでしょうか。母親と一緒に・・・」と。さらに「この後敗戦の昭和20年8月15日までは4年8ヶ月の期間があるのです。その間、明けてもくれても「作戦」と称して中国の人々を焼き、奪い、殺し、拷問を加えたのでした。それが天皇のため、大東亜共栄圏のため、そして自分と家紋の榮譽のためだと信じ込んで・・・」と続けました。

篠塚さんは、旧制中学へは行かずに実業学校へ行ったのですね。その2年生の時に少年隊に入ったのです。坂倉さんは小学校6年のあと高等小学校2年通ったのです。坂倉少年は、家庭の事情で上級の学校へは行けなかったもので、それならば軍隊に入って手柄を立てて、軍隊で出世するぞ、という強い思いを持ったのです。そのころを思い起こしてお話し下さい。

貧乏から抜け出したい

坂倉：農家の長男は跡を継がなければならない、ということが世の習わしのようになっていましたが、私の家は貧乏だったのです。貧乏といってもいまでは考えられない状態だったのです。家は小作農家だったのです。土地を借りて米を作りますが、土地を借りる代償として収穫の半分は地主に収めなければならないのです。しかも検査に合格した良い米を納

めるのです。

私のお爺さんとお祖母さんは早くに亡くなって、父と母が二人で精一杯働いても生活はたいへんだったのです。しかも当時の昭和の不景気はは並大抵ではなかったのです。自分の娘を売って生活の糧にしなければ食べることもできない現実が、私の周りにもありました。東北の方から何 10 人も買った娘を、花柳界に売ったりするブローカーがいるような社会だったのです。

母親も現金収入を求めて仕事に出ました。そのために私が小学校 4 年生の時から、しょっちゅう「今日は学校を休め」、と言われて弟や妹の面倒を見なければなりませんでした。だからそのときの経験からご飯も炊けるし、家事のことは何でもできるのです。だから、じっさいにそのために軍隊へ行っても困りませんでした。

この貧乏から抜け出すことができないものか、と考えはじめたのですが、それには軍隊に入るしかなかったのです。私はそれほど体格がよくなかったので、その軍隊も無理かなあと考えていたのです。だが、昭和 12 年の廬溝橋事件を契機に、軍隊の募集が拡大して徴兵の基準が段々に下がってきたのです。当時私の身長は 158 ㎝しかなかったのです。そのうちに私より背の低い人が甲種合格した、という朗報が入ったのです。それでは、ということで徴兵検査を受けたところ見事に甲種合格となったのです。

高柳：昨日お話しされた絵鳩さんは東京帝国大学を卒業された方で、軍隊に入ったときの印象は坂倉さんとは違うものが

あると思いますが、坂倉さんの場合は甲種合格ということがどんなに嬉しいものか、ということ語ってくれました。甲種合格となって、中国へ行って立派な兵隊になってやろうと考えたのですね。私は当時歴代天皇の名前を暗唱しましたが、軍人の場合は軍人勅諭の暗唱の他に歩兵操典、陸軍礼式令、陸軍刑法、等々最近陸軍から帰ってきた先輩から聞いて入隊前に必死で勉強したのでした。

こうして皇国少年が大きな志を抱いて軍隊に行ったのです。それでも人を殺すということは容易なことではなくて、いま話されたように何時までも何時までも、赤子の笑った顔が焼き付いているということ話をされます。でも、慣れちゃうのですかねえ。そのあとも、びっくりするようなことを何回も経験されたのですよね。つらい話ばかりでしょうが、もう少し紹介していただませんか。

坂倉：あのあと 7 月から 8 月にかけて、初年兵教育に雑教育隊へ行けと命令されてある部落へ行ったのです。山の中のあある民家を借りて、毎日毎日、昼はごろごろして、夜になると教官である小隊長につれられて、30 名くらいの部隊で銃をもって出かけたのです。情報を集めたり、八路軍を探して捕まえたりするための行動だったのですが、その過程で私は拷問ということを経験したのです。

小隊長は拷問が好きなのです。生やさしいものではありません。ある日、村落をかき回して、そろそろ帰るということで次の村落へ近づいた。その部落の 2 km くらい手前のところで、小隊長は「止まれ！」と命令した。目の前にかなり深い

溜め池がありました。小隊長が「オイッ！」あごをしゃくると、古兵たちがその溜め池に6, 7人を数珠つなぎにした農民を連れてきたのです。見るからに農民でした。小隊長は「こいつらを放り込め！」と命令するのです。私はびっくりしたのですが、少々小利口な兵隊たちが池の中へ放り込んだのです。そして「あがってくる奴はヒッパタケ！」と言うのです。小隊長自らが池の淵にかけた農民の手を踏んづけるのです。それを見て、他の兵隊たちも功名を立てようと「我こそは」とばかりにはい上がってくる農民を棒や銃でこづいて突き落とすのです。頭をひっぱたいたり、色んなことをしてとうとう農民たちはい上がる力もなくなったのです。私もここでは、他の奴らに負けてはいけない、自分の出世にひびく、と思ったのです。丸太ん棒でこづいたりしました。30分くらいそんなことをしていました。池の中は血で真っ赤になって、半分は死んでいたでしょう。残りの半分の人たちもぐったりしていました。

すると小隊長は、何のためにそんなことをしたのか私にはまったくわからないまま、「帰るぞ！」と帰ってしまったのです。中国の農民たちにとってはたまったものではありません。こんなことを何回も何回も経験しながら、拷問というものを覚えてきたのでした。

わたしの拷問体験

拷問の体験ですが、昭和17年の1月頃のことでした。中国の正月で春節のころ山東省の平原県というところがあります。天津から南京への津浦（シポ）線の

沿線です。その平原県の周りをぐるぐると3日くらい回っていたのです。何のために回っているかということはわからなかったのです。

3日目にある村落で休憩して、「明朝出動」と命令があって、一個中隊60名くらいで出動しました。小隊長が通訳兵に命じて、この村落のみんなをいい話があるからと言って集めてこい、と命令しました。私たちも一緒に行ってみんなを引っ張ってきました。住民60人くらいを村落の端にある広場に集めました。通訳を通じて小隊長は「この村落に八路軍が来ただろう！」あるいは「兵器を隠してはいないか！」と、「この2点について知っているものは返事をしろ！」とみんなに伝えた。誰もが一樣に「知らない」と言った。

「知らないのなら仕方ない」「それでは」、ということで兵隊たちに命令した。「兵隊2, 3人で適当な農民を一人ずつ連れて行け！」と命令されたのです。それぞれ一軒一軒の家の中へ連れて行って締め上げろ、ということでした。何かが出てくるだろう、ということでした。私はこれも一つの功績を挙げるチャンスだと思ったのです。古い兵と同年兵と3人組で40才前くらいの屈強な男を引っばっていたのです。彼は何の疑いもなく付いてくるのです。そこである一軒の家へ門をくぐって入ったのです。

古兵が「直ぐにやるぞ」と言いました。私は水飲みの拷問のことだと直ぐにわかったので、急いで戸板を外してきました。初年兵と一緒に「寝ろ！」と命令したらおとなしく寝たのです。私たちはロープで素早く戸板に縛り付けたのです。そこ

でようやく「なぜ縛るのか！」と怒り始めました。

「今ご馳走してやるから黙っている！」と言って怒鳴り返したのです。「安井（坂倉さんの旧姓）、お前水を汲んでこい！」と命令されました。もう一人の初年兵には「布をたくさん探してこい！」と命令されて、それぞれ準備しました。古兵は濡れた布を男の顔にピタッと貼り付けました。その上から私はやかんに入れた水を上から飲ませるのです。はじめは呼吸を止めたり、抵抗して水はなかなか水を飲まないのです。時間が経つにつれて、いつまでも呼吸を止めてはいられなくなって、自分の意思ではどうにもならなくなってくるのです。手足を縛って、一人は頭を押さえて、私が水を飲ませるのです。呼吸する度に鼻から、口から水を飲まざるをえないのです。飲ませている間も質問は止めません。

「あるのか、無いのか？」「見ていないか？」と繰り返すのです。その度に「ありません」としか答えが返ってきません。そうすれば「もっと飲ませろ！」となって、相当飲ませたと思ったところ古兵は「もう腹が一杯だからもうだめだ」と言って、腹の上の乗って足で踏んだのです。そしたら腹の中に溜まった水がドバツと出ました。血が混じっていました。

腹が空になったのでまた私は水を飲ませるのです。だが、どんなに続けても駄目なのです。これ以上どうするか、いっそうのこと「ヤッちゃおうか！」という議論もしました。だが、「駄目だ、それでは元も子もなくなる」ということでした。

「ではどうしますか」ということで、私が焼酎を飲ませましょうか、と提案して

「それがよかろう」ということで、どこの家でも焼酎がたくさんあります。それを集めてきて、今度は焼酎を鼻から、口からグイグイと飲ませるのです。

それから10分もしないうちのその農民が「ある」と応えたのです。私は「シメタ」と思いました。これは出世ものだと思んだのです。急いでロープを解いて、「どこにある！」と問いつめました。だが、もう言葉も出ない状態で、そこへ連れて行けと引っぱってももう歩ける状態でもなかった。二人で両肩から支えて案内させたところ、その家の中へはいってオンドルを指して「ここだ」というのです。そのまま倒れてしまいました。死んだのです。

しかたなく一端部隊に引き上げよう、ということで通りがかりに柳の下に井戸があつて、そこで中隊長が村長を縛り上げて拷問していました。私たちと同じように「銃は隠していないか！」「八路軍はきていないか！」ということを詰問していました。「言わないと殺すぞ」と脅かすと、彼に付いてきた10数名の農民がわーっと声を出して、立ち上がるのです。その農民たちを威嚇するための兵隊たちが銃剣つけた銃を突きつけるのです。何回やっても白状しないのです。とうとう最後には中隊長は、「ダメだ、これは」と言って部下の軍曹に「お前、ヤレ！」「お前の新品の刀の切れ味を試してみろ！」というわけです。

軍曹は、村長を井戸の方に向けて座らせて、刀に水をかけて準備を始めました。そこで小隊長は「力みすぎて力が余ると自分の足を切ってしまうぞ、気をつけろよ」と注意を与えました。曹長は足がふ

るえていましたが、村長の首をバサッと落しました。血がドバツと飛びました。通訳の兵隊がその古井戸に村長を放りこんだのです。こうして拷問を繰り返したのですが、兵器もなかったし八路軍もいなかったのです。そこを引き上げました。

高柳：ここまで三つの事例を話してくださいましたが、この三つだけ聞いてもぞっとしますよね。私の場合、神風が吹くということを疑問にも思わなかったのですが、坂倉さんはこんな非道いことをなぜできたのでしょうかね。

坂倉：私も殺すことはいやだった。銃を撃つことも剣で突くこともやりたくはなかった。なぜかという銃は撃てば煤で汚れて、後の手入れがたいへんなのです。剣で突けば血糊でやっかいです。その手入れが悪いと上級の兵からさんざんな目にあうのです。だからなるべくそうならないようにしよう、考えるのです。それでも自分がやったことが功績に結びつくと思えば、喜んでやったものです。

高柳：坂倉さんは軍隊で出世するぞ、という志は着々と成果を収めて、この時点では「一等選抜」で上等兵になっていたのです。誰でもが上等兵にはなれません。それだけ評価をされたのです。皆さんもそうでしょうが、アジア人同志で同じ肌の色をしていますよね。しかも遠くの方にいる人に銃を撃つということは「戦争だから・・・」ということのできるかも知れません。しかし目の前にいる生の人間に対してどうしてこんなことができてしまったのでしょうかね。

坂倉：振り返ってみれば子供の時からの教育ですね。子供の時から「日本人は東洋一の優秀民族」だ、と常に教えられていました。中国人も朝鮮人も当時から日本にいたのですが、人のいやがる肥え汲みや、ボロを回収している朝鮮人などを見て蔑んでいました。中国人には「チャンコロ」と言っていました。中国人は人間じゃない、と思ったのです。そんな気持ちですから、牛や犬ころを殺すような気持ちだった。

高柳：教育は怖いですね。差別思想、蔑視です。日本は世界で唯一の神の国だと、本当に私もそう思っていたのです。その逆に中国人や韓国人は下の下だという、牛や馬と同じなんだということですね。だからあんなことができたのですね。教育ですね。

別の方から強姦の話を聞きました。慰安所へ行けばお金を払わなくてはならない。だが作戦で、村落の家にいる女がいれば強姦してもお金を払わなくていい、そして殺してしまうのです。しかもその殺す理由をその方はこういっていました。神の国の崇高なる戦士の種をこんなチャンコロなどに残すなんて、そんなもったいないことはできないと、だから殺すという理屈をつけるのです。強姦の後は殺したのです。よくここまでの蔑視思想を教え込まれたものだと思うのです。大昔の話ではないのですよ。現にその教育を受けて、実際にそんなことをやった坂倉さんがここにお出でになるのですから。その坂倉さんがなぜこの様な証言をされるようになったのか、ということに話し

を進めます。先ずシベリア体験を話してください。

寒さと飢えのシベリア体験

坂倉：まずは寒さと飢えですね。寒さと飢えで多くの人が死んでいきました。その人たちは殺されたのだと私は思います。私が教育した補充兵で長野県出身の10才も年上の人ですが、体力的に朝出かけて帰ってくるだけが精一杯なのです。日曜にはみんな裸になってオンドルの上で着ているものを乾かして、みんなで虱退治です。退治しないと虱に栄養分をみんなとられてしまうのです。そのくらい不潔で、風呂もなかったのです。

仕事は毎日で、食事は昼食に黒パン300グラムです。ある日、工作中に監視兵が私のところへ来て、遠くへ行ったダメだ、監視の届く範囲で仕事をしろ、というのです。しかし私の仕事は道路の整備作業ですから、先へ進むのは当たり前です。それでは仕事にならない、と抗議すると「命令だ！」というのです。「命令でも仕事は仕事だ」と押し問答をしたこともありました。また畑に少し残っている大豆を拾って持ち帰り、水に浸して柔らかくして腹の足しにするようなこともしました。しかしある日、監視兵が来て「畑から出ろ！」と命令してきました。「腹が減って、どうにもならないんだ！」と抵抗したら「撃つぞ！」と脅かされました。本当に撃つことはないだろうと「撃って見ろ！」と返事したら本当に自動小銃を撃ってきたのです。ダダダダッと、10発くらいの弾が足下で弾いたのです。みんなびっくりしました。

またある日、百瀬という補充兵は「班長殿、いつ帰えますかねえ」と聞いてくるのです。私は返事に困りました。だが、ロシア兵から「スコール、ダモイ」「スコール、ダモイ」（直ぐに帰るぞ）としょっちゅう言われていたことを、その補充兵に言うしかなかった。「暖かくなったら間もなく帰れるよ」と慰めることしかできなかった。すると「班長殿、暖かいどんが食べたいですねえ」というのです。「百瀬、そんなこと言うなよ、おれも食べたいよ、よけいに腹が減っちゃうよ」と会話して彼はそのまま寝たのです。そして朝起きてみたらその人はもう冷たくなっていたのです。私だけの体験ではない。こういう事例はいっぱいありました。彼に何もしてやれなかったのです。

高柳：強制労働と寒さと飢えの、それは厳しい日々だったですね。ようやく「ダモイ」と、今度こそ帰れると思って乗った貨車が着いたところは中国だったのですよね。そのときどう思いましたか。

坂倉：ソ連の貨車から中国の客車に寄せられたときは、地獄と天国のちがいを感じました。8月の本当に熱い時に3段に仕切られた貨車に閉じこめられて、横になったらそのまま、スキマもないのです。身体を横にただけでその分、隣の人の汗が2段目の人に落ちて、拭くこともできずさらに下の段へ、中段の人の汗も落ちてくるのです。汗をぬぐうために手をスキマから抜いても、その分隣の身体が詰められてしまうのです。そんな苦しみの中でようやく着いたのが、

国境の街・綏芬河(スワンガ)でした。

高柳：その前に、行き先が中国だとわかったとき、「戦犯」にされそうだとわかったときはどう思いましたか。

坂倉：昭和23年ころシベリアで、何回も移動されたあとシタンと言うところの収容所にいたときにソ連の憲兵から取り調べを受けました。

高柳：撫順戦犯管理所へ着いたとき、「戦犯」という文字を見て「なぜ俺たちが戦犯なのだ、戦犯とは戦争を決めたり、命令したりした天皇や、最上級の指導者は戦犯であっても、われわれは命令に従っただけだ。「なぜ戦犯に問われなければいけないのだ」と、多くの人が反抗したと聞いていますが坂倉さんもそうでしたか。

坂倉：私は撫順戦犯管理所というところはどういうところかを、まったく知らなかったのです。900数十名の最後の方に私が入ったのです。ところが先に入った人たちがとにかく大騒ぎをしているのです。なんで騒いでいるのかわからなかったのですが、最後に入って入り口で「戦犯管理所」の看板を見て騒いでいることがわかりました。

軍隊の階級の上の人や、満州国の上級役員たちがいて、その人たちを中心に騒いでいたようですね。私はよく解らなくて、騒ぐ気もなくぼ一然としていたように記憶しています。夜の食事が運ばれてきて、みんなに「食べたいだけの量を食器に盛れ」と言われて食器を与えられたら、食器がガチャガチャする音だけにな

って静かになってしまいました。とにかくロシアの食事とはまったく違うのでびっくりしました。

次の日から管理所側はなんにも言わないのです。みんな困ったなあと思っていたのですが、そのうちご飯粒を塗りつぶして、乾かして、絵心のある人が描いて基石をつくったり麻雀パイを作ったりして遊び始めました。

そのとき初めて班長に叱られました。農民が手塩をかけてつくった食物を無駄にしてはいけません、と。あとでわかったが管理所の指導員の中には、自分の身内が日本軍に殺された人もいます。反省はしたが、そのときは本当に反省したわけではなかったのです。ほとぼりが冷めればまた何かの手だてを考えて遊び始めます。

生まれ変わらせてもらった

高柳：管理所で「生まれ変わらせてもらった」と言われるが何がその原動力になりましたのかを聞いてみると、学習と文化活動がめいっぱい保証されるのですね。坂倉さんはどんな文化活動をされましたか。

坂倉：文化活動は何もできないので、子供の時覚えた安来節をやったことがあります。

高柳：段々と難しい勉強が始まると坂倉さんは一生懸命ノートに写しとって、努力したのですね。そのあたりの勉強されたときの話をしてください。

坂倉：学習問題を提起されたときは、もうすでにみんなの考えが変わってきていました。大学を出た人たちが講師になって講義を受けました。講義を聴きながら書き写して、疑問な点は質問して、それをみんなで間違いがないかを読み合わせをしながら訂正して、さらに次の講義の準備をするという方法でやってきました。

社会発展史を勉強しました。これが私にとって何よりの宝になりました。簡単なことでいうと、中国では死んだら棺桶を造る人もいるが自分が使うためのものではない、商品として売ってお金を稼ぐのです、という話から段々に発展して解いていくのです。そして最後には帝国主義論になるのです。

高柳：他の方も社会発展史を勉強したことが大きな意味があったと言います。農村の小作農の人たちはなぜあんなに貧しかったのだろうか、とか。自分をその社会発展史に乗せて、そのような意味が解けてきたのでしょうか。自分と繋げて理解ができたのです。

それでも学習は苦痛が伴いますね。その苦痛をのりこえて勉強した方々もすごいし、そのことを為し遂げた管理所もすごいですよね。そしてこの人たちの意思を受継いだ「撫順の奇蹟を受継ぐ会」がつくられていますよね。最初私は篠塚さんに話したのです。なんで「奇蹟」なのって。「奇蹟」って引かかるねえと、話し合ったことがあります。

だが、今にして思うと、やはり「奇蹟」だなあ、と思います。1000人もの人が帰国して、戦後こんなに期間が経っているのにこうして語って下さっていると

いう、しかも自分の罪行を話すということが続けてこられて、やはりこれは「奇蹟」と言っているのでしょうか。最近になって私は、抵抗なくその言葉を使っています。

文化活動についても篠塚さんから聞いたのですが、あそこで初めて卓球とかテニスなどをやった、と言うのです。夜になるとモーツァルトの音楽が聞こえてくるのだよとも言っていましたねえ。

坂倉：私はねえ、朝鮮民謡が好きだったのです。学習の前に音楽が流れてくるのです。朝鮮民謡が流れてくると嬉しくなっていて涙が出てきました。非常にいい音楽なのです。心に染みるのです。

高柳：やはり文化活動も含めた学習が人間をつくっていく決め手だなあ、と思いますね。管理所での話を聞く度に思うのです。こうして日本に帰国して仕事をし、定年になって今も証言活動をされています。この本を書くときに、この本は中学生、高校生に読んでもらうのが目的なので、本の最後のところで、日本の若い人に遺言を書いてくれませんかとのんで書いていただいたのです。

今日ここ参加されている、後に続く人たちに言いたいことがあれば話してください。

人間は変わることができる

坂倉：本にも書きましたが、私が声を大きくして言う資格もないのですが、本当に言いたいことは、本当に身体の奥底から本当に戦争をやってはダメだ、という

ことです。戦争からは絶対にいいものは生まれてこない。戦争の傾向が少しでも現れたら火を消さなくてはなりません。この事を言いたくて書いてあります。繰り返します。戦争は悪いことばかりで、いいことは一つありません。

戦争を考えると、自分は加害者だといふところから話をしなければなりません。ということも付け加えておきます。

坂倉：一言言い残しました。学習の中で自分の考えが180度転換したきっかけは社会発展史の最後の帝国主義論に入ったときでした。資本主義が帝国主義に入って発展したとき、最後にはお互いを殺し合うのだと、そして最後は滅亡するということで勉強が終ったのです。

だがその後、「君たちはこの帝国主義論と自分を結合してこれから学習しなさい」と放り出されました。そこで困りま

した。自分と結びつけろと言われてもどうということかわからない。ある時、宮崎弘という中隊長が、みんなの前で自分の罪行を全部さらけだす証言をしたのです。最上級の上官たちもみんないる前で、です。そして最後に「私に極刑を与えてください」と言ったのです。私は考えさせられました。帝国主義論と自分を結びつけると言うことはこれだなあ、と考えるようになりました。自分自身が帝国主義者だったのですね。そのことに気がついたのです。

人間は考え方を変えることができるのです。それから自分はすっかり人間が変わりました。日本へ帰ってからも、すべてこのことを自分の磁石にして考え、行動をしてきました。これからは機会があれば、語り部としてやっていきたいと考えています。

日本の若者への遺言

高柳：この本の最後に私が坂倉さんに、「日本の若者への遺言」ということで宿題をお願いして書いてもらいました。

日本に若い皆さんへ

- ・戦争は無惨なものです。
- ・戦争からは良いことは生まれてきません。
- ・戦争の兆しがちょっとでも見えたら、すぐ消しましょう。
- ・若い皆さんは私の遺言を受けて下さい。
- ・若い皆さんの力を信じてペンを置きます。

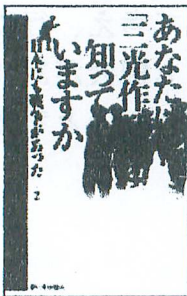
2007年（平和憲法60周年）5月3日

ということで締めくくっていただきました。

でも、兆しはとっくに見えていますよね。憲法9条の抹消を狙った国民投票が直ぐ目の前に迫ってきています。私たちはいまこの遺言を受けとめながら何をすべきか否かを一人一人が問われていると思います。

坂倉 清さん 1920年、千葉県生 中国帰還者連絡会会員

高柳美智子さん 東京生、早稲田大学卒業後。中学、高校の国語教師を経て、現在
「人間と性」教育研究所所長



坂倉 清著

高柳 美知子著

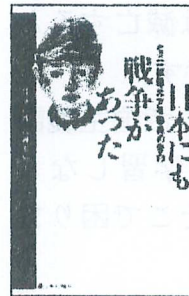
税込価格：¥1,470（本体：
¥1,400）

出版：新日本出版社

サイズ：19cm / 157p

ISBN 978-4-406-05051-7

発行年月：2007. 6



篠塚 良雄著

高柳 美知子著

税込価格：¥1,365（本体：
¥1,300）

出版：新日本出版社

サイズ：19cm / 142p

ISBN：4-406-03102-2

発行年月：2004. 8